

難民映画上映会 レフュジー・フィルム・フェスティバル

Refugee Film Festival



日本の多くの方々に、難民や国内避難民などの問題をさらに身近に感じていただくため、2006年7月20日(木)から7月27日(木)まで、UNHCR駐日事務所は初めて難民に焦点を当てた映画上映会(レフュジー・フィルム・フェスティバル)を開催しました。アフリカ、中東、アジアの難民を題材とした長編映画、ドキュメンタリー、アニメーションならびに難民によって制作された作品を上映し、大変ご好評をいただきました。

レフュジー・フィルム・フェスティバルは、主に東京日仏学院、イタリア文化会館、スウェーデン大使館、東京ドイツ文化センターの都内4か所の会場にて開催されました。カンボジアやタイ、スーダン、アフガニスタン、シエラレオネやパレスチナなどの難民や国内避難民などの問題をあつかった映画が上映され、7月20日の初日に先だち、外国人記者クラブや東京大学、早稲田大学、シネマライズなどで、試写会が行われました。また、7月28日には、ギニアのキャンプからシエラ

レオネに帰還を果たし、プロのロックバンドとして活動をはじめた難民の姿を追った映画「Refugee All Stars」の主人公、Refugee All Stars Bandのメンバーが、フジ・ロックフェスティバル出演のために来日した合間にイタリア文化会館に駆けつけてくれ、「Refugee All Stars」の特別上映会と共にバンドのメンバーと映画監督を交えたトークセッションが行われました。

また、ほとんどの会場にて、上映後にUNHCR駐日事務所スタッフや映画関係者、ピースウィンズ・ジャパンなどのNGOスタッフと来場者の間で、映画や難民問題に関する質疑応答の時間がとられ、活発な意見が交わされました。

レフュジー・フィルム・フェスティバルの開催にあたっては、各会場のご好意により会場を無償で提供していただき、全て参加費無料にてとり行いました。

開催期間中、いくつかの会場で前出のRefugee All Stars Bandや「ガーダ：パレ

スチナの詩」の監督、古居みずえ氏などの特別ゲストからお話を伺う機会を設けた結果、のべ2,500名あまりの来場者を記録しました。

今企画のディレクターとして運営を担当したUNHCR駐日事務所のキリル・コニンは、「難民の人達は、あなた方や私たちと少しも変わらない一人ひとりの人間です。かつてペルーやブラジル、米国などに移住した日本人の人々も、彼らと似たような体験をしたかもしれませんし、難民として日本にやってくる人々にしても、新しい言葉や文化の違いに直面するなど、状況は同じです。難民の人々は、これらの苦難がありながらも、前進して行くのです」と、日本の観客達に訴えかけました。「Refugee All Stars」上映会場では、シエ



ラレオネ出身で10年以上も日本に滞り、内戦で混乱した故郷に戻っていない、という方もいらっしゃる、今回シエラレオネの難民がギニアから帰還し新たな人生をスタートする姿を映画で見て、「自分

もシエラレオネに戻ろうと思った」と語っていました。

また、10月11日から13日にかけて、兵庫県西宮市の関西学院大学においても同様の企画を開催しました。2007年度よりUNHCRと協力し、難民を奨学生として2名受け入れる「難民高等教育プログラム」を開始する関西学院大学の全面的な協力を得て、3日間にわたり難民・国内避難民に関する映画を計9本上映しました。

最後に、今回のレフュジー・フィルム・フェスティバル開催にあたり、多大なご協力をいただいた後援・協力団体を以下にご紹介させていただきます。

UNHCR駐日事務所「レシビ」編集部一同

後援・協力団体(順不同):
(於東京)イタリア文化会館、東京日仏学院、東京ドイツ文化センター、スウェーデン大使館、日本UNHCR協会、A.R.T. Artist Residency Tokyo、在日スイス大使館、駐日欧州委員会代表部、独立行政法人国際交流基金、DHL ジャパン、バービーハウス、ピース ウィンズ・ジャパン、地球市民ACTかながわ/TPAK、シネマライズ、(於西宮)関西学院大学